「教育臨床総合研究18　2019研究」

Margaret H'Doubler(1889-1982)の"*Realization and Appreciation of Music through Movement*(1921)"の分析
― 学習内容と指導方法に焦点をあてて ―

An Analysis of Margaret H'Doubler's "*Realization and Appreciation of Music through Movement*(1921)": Focusing on Learning Contents and Methods of Teaching

廣　兼　志　保*
Shiho HIROKANE

要　旨

Margaret H'Doubler（1889-1982）が1921年に出版した教師用ダンス指導書"*A Manual of Dancing*"のうち、"*Realization and Appreciation of Music through Movement*"を講読し、ダンス担当教師の育成においてH'Doublerが示した、ダンスのための音楽と動きの学習における学習内容と指導方法の具体を明らかにした。また、学習内容と指導方法にみられる実践と理論の往還、主観的な認知と客観的な分析の往還、ヴァリエーションの展開、動きの探求と創作による自発性の育成といったコンセプトは、1920年代にH'Doublerが提示したダンス教育理論に一貫してみられ、彼女のダンス教育理論を特徴づける考え方であることがわかった。

〔キーワード〕　Margaret H'Doubler，ダンス教育，教員養成，音楽と動き

Ⅰ　研究の目的と方法
1．研究の背景と経緯

筆者は、これまで、日本の学校体育、中でもダンス領域におけるアメリカ合衆国（以下、アメリカと略称する）からの教材と指導方法の移入と普及の様相について研究を進めてきた。そして、1920年代後半から1930年代にかけての日本におけるナチュラルダンス教材の受容と普及の過程で解剖学や運動学の観点からの運動技能に関わる知識・理解の学習内容が欠落していったことが、その後の日本のダンス領域の学習内容が移入元のアメリカの学習内容とは異なる方向へ展開していった契機となったのではないかということを示唆した（廣兼, 2015, p.31）。

日本に移入されなかった前述の学習内容とはどのようなものであったのかを明らかにするため、筆者はMargaret H'Doubler（1889-1982）が1921年に出版した教師用指導書"*A Manual*

*島根大学教育学部初等教育開発講座

of Dancing：Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing”（『ダンスの手引き―ダンス教師のための提案と参考文献目録』―筆者による訳出。以下、“*A Manual of Dancing*”と略称する）を分析し、ダンス教育におけるH’Doublerの指導観・教材観・学習内容・動きの基礎的要素を学ぶための教材の実際・めざす学習者像を明らかにした（廣兼, 2015, pp. 29-41）。

H’Doublerはウィスコンシン大学マディソン校ダンス専攻の教員を長らく務め、全米のダンス教育の発展に寄与した人物である。

ウィスコンシン大学マディソン校は、1921年にアメリカの大学で初めてダンス専攻のコースを設置し、全米各地の初等中等教育機関及び大学に多くのダンス教員を輩出してきた大学である（Kraus, Hilsendagar, and Dixon,1991,p.300；木場, 2017, pp.79-83）。H’Doublerは、ウィスコンシン大学マディソン校女子体育学科のディレクターであったBlanche Trilling（1876-1964）とともにダンス専攻の設置を計画しダンス専攻のカリキュラムを作成した（Brennan, 1972, p.14：木場, 2017, p.79）。ウィスコンシン大学が掲げる理念である“The Wisconsin Idea of Education”（Hagood, 2000, pp.81-82；五島, 2008, pp.89-109.）を背景にH’Doublerが提唱したダンス教育理論は“The Wisconsin Idea of Dance”と呼ばれ、ウィスコンシン大学マディソン校ダンス専攻の卒業生が教師として各地に赴任していくとともに全米に普及していった（木場, 2017, pp.81-83）。さらに、1940年に出版されたH’Doublerの著書“*Dance；A Creative Art Experience*”を通して、その理論の一部は第二次世界大戦後の日本のダンス教育の改革にも影響を与えた（ドゥブラー, 1974, pp.212-219）。

“The Wisconsin Idea of Education”とは、州立大学は全ての州民のための開かれた大学を目指し大学の研究成果の社会への還元を通して社会の進歩に貢献するべきであるという考え方であり、労働者に対する教育機会を拡充することで富の公正な再配分をもたらし、民主主義社会を実現しようとする考え方であった（五島, 2008, p.70,84,94.）。そして、H’Doublerのダンス教育理論である“The Wisconsin Idea of Dance”もまた、プロフェッショナルな舞踊家を志す学生のための専門教育ではなく、全ての人々を対象とする一般教育として展開された。

本研究の対象である“*A Manual of Dancing*”は、一般教育としてのダンスを指導する教師のための指導書として執筆された。本書は、*SECTION Ⅰ*“*Teaching Interpretative Dancing as An Educational Activity*”で教育観と教材観を提示した後、*SECTION Ⅱ*“*Exercises for Fundamental Motor Control*”で基礎的な身体訓練のための学習内容と教材を紹介し、次いで*SECTION Ⅲ*“*Realization and Appreciation of Music through Movement*”で運動を通した音楽の認識と理解のための学習内容と教材を紹介した後に、*SECTION Ⅳ*“*A Suggested Plan of Twenty-Four Lessons For Beginners.*”で*SECTION Ⅱ*と*SECTION Ⅲ*で紹介した教材を用いた指導計画を提案するという構成となっている。本書を読解し分析することによって、H’Doublerのダンス教育理論において教師が理解しておくべき専門的知識や能力が何であると考えられていたかを読み取ることができると思われる。

ダンス担当教師の育成において、H’Doublerはどのような専門的知識や能力を修得させようとしていたのか。それを明らかにするため、前述のように、筆者は“*A Manual of Dancing*”の*SECTION Ⅰ～Ⅱ*の講読から、H’Doublerが開発し提案した“*Exercises for Fundamental Motor Control*[1)]”を分析した。その結果、身体の解剖学的構造の理解に基づく動き方の学

習の概要を明らかにすることができた。その結果は以下の①～③のようにまとめられる(廣兼, 2015, p.39)。

①H'Doublerは、ダンスを身体運動による創造的な自己表現活動であると捉えた。そして、自由な身体表現は、表現媒体としての身体が、生来解剖学的に備わっている人体の基本的な動きを自在にコントロールできるようになってこそ可能となると主張した。

②H'Doublerは、学習者の創造性を育てるにあたって、学習者自身の身体感覚を通して基本的な動きを理解し習得させるという指導をめざした。そのため、解剖学的な観点や運動学的な観点から学習者に動きを理解させようとした。

③H'Doublerの指導実践において、学習者は、観察と体験により、実践と理論そして主観的な認知と客観的な分析とを往還する過程を通して、基本的な動きの構造を理解しコントロールできるようになることが求められた。

2．研究の目的

これまでの研究の経緯は前述の通りであるが、"*A Manual of Dancing*"の読解と分析において、*SECTION* Ⅲ "*Realization and Appreciation of Music through Movement*"[2]の読解と分析は未だ残されている。したがって、本研究の目的として、以下の①②が設定される。

①"*Realization and Appreciation of Music through Movement*"を対象に、ダンスのための音楽と動きの学習に関する記述の読解と分析から、ダンス担当教師の育成においてH'Doublerが示した、ダンスのための音楽の学習における学習内容と指導方法の具体を明らかにする。

②①で明らかになった音楽と動きの学習内容と指導方法が、"*Exercises for Fundamental Motor Control*"における前述の①～③に示した教材観や指導観と共通しているか否かを確認し、H'Doublerの"The Wisconsin Idea of Dance"の特徴について考察する。

3．研究の方法

本研究は、H'Doublerが1921年に出版した教師用のダンス指導書である"*A Manual of Dancing：Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing*"[3]を対象とした。本書はH'Doublerの「オリジナルなメソッドを理解するための重要な参考文献となる」(Hagood, 2000-2001, p.6）と評価されており、1920年代初頭のH'Doublerの指導実践の具体を知る手がかりとなる資料である。

本研究では、*SECTION*Ⅲ"*Realization and Appreciation of Music through Movement*"を講読し、学習内容と指導方法に関する記述を抽出し分類した。講読にあたっては、H'Doublerによる原文を『教育用音楽用語』(文部科学省, 1994)と照合しH'Doublerが原文に用いている音楽用語の意味を確認しながら、全訳を作成した。次いで、それらの全訳をもとに学習内容及び指導方法の特徴について考察した。

H'Doublerは、学習者に音楽の簡単な構造について理解させ、動きを通して基礎的な特徴を意識させるためのアイディアを、"*Realization and Appreciation of Music through Movement*"において、Ⅰ～Ⅻの12項目に記述した。これらの項目には、学習内容、指導方法、教材例、題材例に関する記述が混在している。そこで、筆者は、H'Doublerの記述から学習内容と指導方

法について書かれている文章を抽出し、それら12項目各々の概要を明らかにした後、学習内容と指導方法の２つに分類して、*“Realization and Appreciation of Music through Movement”* 全体を貫く学習内容と指導方法の特徴を考察した。その際、教材例や題材例については、指導方法の考察の際に扱うこととした。

Ⅱ　結果と考察

１．*“Realization and Appreciation of Music through Movement”* の12のアイディアの概要

Hagoodによれば、H’Doubler のダンス教育における科学的なアプローチは、ダンスを通した教育の在り方を考えるうえで、当時の新しいパラダイムとなったという（Hagood, 2000, p. 95）。ウィスコンシン大学はダンス専攻を設置するにあたって、カリキュラムの中にRhythmic Analysisという科目を設定した。この科目の授業担当者はH’Doublerであった（Haggod, 2000,p.99, 35-339；木場, 2017, pp.81-82）。では、H’Doublerはダンス教育における音楽の学習において、どのようなアプローチを試みたのであろうか。

H’Doublerは、*“Realization and Appreciation of Music through Movement”* の第一の目的を、音楽の簡単な構造についての一般的な理解を学習者に与え、動きを通してその基礎的な特徴を意識させることである、と述べ、学習者は筋肉をよりよく制御できるようになるとともに音楽をよりよく理解できるようになることによって上達していく、と主張した（H’Doubler, 1921, p.51）。このことから、筋肉運動の制御と音楽の理解とはH’Doublerのダンス教育においてどちらも重要な学習内容であり、学習者には、双方の能力を統合させながら発達させていくことが求められているといえよう。

彼女が提案した音楽の理解の具体的な内容及び方法としての12のアイディアの概要を以下に示す。

（１）Ⅰ～Ⅳの概要―音楽の構造と要素の理解―

Ⅰには、「音楽の構造についての単純で明確な説明をしなさい。音符のブロックか黒板を使って示範しなさい。」（H’Doubler, 1921, p.51）とのみ記述されている。音楽の構造の説明と示範の具体的な内容と方法が、続くⅡに記述されているものと考えられる。

Ⅱでは、聴き取りの観点を学習者に与えて１節の音楽を聴かせ、メロディの認識とアクセントの役割を学ばせることが記述されている。H’DoublerがA.～F.の６つの文章に記述した内容から筆者が読み取った聴き取りの観点は以下の通りである。

A．メロディの抑揚
B．音の質感
C．音価（音の長さ）の変化
D．アクセントによって区切られた小節の構成
E．小節の区切りにおけるアクセントの役割
F．表現におけるアクセントの役割

A．C．D．E.からは、音の高さや長さや強さといった物理的な要素から音楽が構成される、という客観的な知識の習得が目指されていることがわかる。また、B．F.からは、音の質感や表現といった感情的な認識が目指されていることがわかる。客観的な知識と表現に関する感情的な認識を通して、音楽がどのような要素から成り立っているかを学ばせようとしているとい

える。

Ⅲでは、「音の関係について短い講義をしなさい。以下の事柄[4]（テンポ―筆者による補足）に反応することとピッチ（音高―筆者による補足）に反応することとを区別してください。」(H'Doubler, 1921, p.52)との記述があり、Ⅳでは拍子と音価の関係が示されている。H'DoublerがA.～C.の3つの文章に記述した内容から筆者が読み取った分析の観点は以下の通りである。

A．拍子（beat―筆者による補足）と小節のアクセントの関係

B．拍子と音符との区別

C．音符の音価

A.では、2拍ごとに最初にアクセントがあれば4分の2拍子になり、3拍ごとに最初にアクセントがあれば4分の3拍子になる(H'Doubler, 1921, p.52)、というようにアクセントの位置が拍子を形成することを学ばせている。

B.では、音符のブロックか黒板を使って、拍子と音符を区別することを学ばせている(H'Doubler, 1921, p.52）。

C.では、拍子と等分の音価について学ばせており、等分の音価と不等分の音価について取り上げている(H'Doubler, 1921, p.52)。H'Doublerは、等分の音価とは音の長さが均等な間隔で次へと続く音符であると記述し、例として全音符が4拍を成すこと、二分音符が2拍を成すこと、四分音符が1拍を成すこと、八分音符が2分の1拍を成すこと、十六分音符が4分の1拍を成すことをあげている(H'Doubler, 1921, p.52)。また、不等分の音価とは音の長さが不均等な間隔で次へと続く音符であると記述し、例として付点八分音符に続く十六分音符で1拍を成すこと、十六分音符に続く付点八分音符で1拍を成すことをあげている(H'Doubler, 1921, p.52)。

以上のことから、Ⅰ～Ⅳでは音楽の構造と要素の理解について記述されていることがわかった。

（2）Ⅴ～Ⅷの概要―音価の知覚と運動の知覚の統合―

Ⅴでは、等分の音価と不等分の音価に相当するダンスステップがどのような動きであるかを学ばせようとしている。それらの基本的な動きの例として、以下のA．B．が提示されている。

A．等分の移動

B．不等分の移動

A.では、等分の音価に相当する移動運動のダンスステップとして、ウォーキング、ランニング、リーピング、ホッピングが提示されている(H'Doubler, 1921, pp.52-53)。

B.では、不等分の音価に相当する移動運動のダンスステップとして、スキッピング、スライディング、ギャロッピングが提示されている(H'Doubler, 1921, p.53)。

A.B.いずれも、音楽のリズムと動きとを対応させながら、個人で様々な方向に動いたり、様々な人数のグループで動いたり、様々なフォーメーションで動いたりするなど、1つの動きを、方向、人数、フォーメーションを変化させた様々なヴァリエーションへと展開させている。

Ⅵでは、音価の組み合わせによって形成されるダンス形式について記述されている。典型的

なダンス形式の例として、ワルツ、マズルカ、メヌエット、ポロネーズ、ポルカ、ショティッシュ、ガボット、マーチが提示されている(H'Doubler, 1921, p.53)。具体例としては、これらのダンス形式についてディスカッションした後、それぞれのリズムパターンの音楽に基本的な動きを組み合わせる、という活動が提示されている(H'Doubler, 1921, p.53)。典型的なリズムパターンにおいて音の長さと動きのタイミングの調和を学ばせようとしていると考えられる。

Ⅶでは、動きによってリズムを強調するための知覚を発達させようとしている。具体例としては、4分の4拍子を使った4人組の10種類の活動が紹介されている。学習者は1人ずつ拍にのって様々な基本ステップや動作やポーズを行う。動作は劇的に表現される。そして、テンポ、身体部位、人数を変化させ様々な動きのヴァリエーションへと展開させている（H'Doubler, 1921, p.54)。ここまでは1小節の中で行われる動きのヴァリエーションを創ることを学ぶ活動であるが、続く5種類の活動では、次第に連続した複数の小節の中で行われる動きのヴァリエーションを創ることを学ぶ活動へと発展していく。つまり、単体のリズムパターンの学習から一連のフレーズの構成の学習へと発展している。

フレーズ構成の具体例としては、3人組で各自異なるステップをさせ、ステップに変化をもたせながら音価とポーズを組み合わせた動きのパターンを創って劇的に表現する、という活動が紹介されている(H'Doubler, 1921, p.54)。これらの活動で、学習者は、ピアニストが演奏する伴奏音の音価と異なるリズムパターンのステップをしたり―例えば等分のリズムであるランのリズムパターンでピアノが演奏されているときに学習者は不等分のリズムであるスキップをするなど―、異なるテンポでステップをしたり、異なる拍で指をスナップしたりすることが求められている。同時にあるいは連続して異なるテンポやリズムパターンを動いて音楽と動きを対比させ、引き立たて合わせる多様な方法を学ばせようとしていることがわかる。

さらに、仰臥位から座位、そして立位へと姿勢を変化させながら、両脚、両手、腕全体、頭と上半身、全身、と、様々な部位を動かして音楽に反応するという活動も紹介されている(H'Doubler, 1921, p.55)。このように仰臥位から立位に向かって少しずつ部位の動きから全身の動きへと発展させていく方法は、“*Exercises for Fundamental Motor Control*”にみられる指導方法とも共通している(廣兼, 2015, p.39)。

Ⅷでは、リズム的なアクセントづけのための知覚を発達させる8種類の活動が提示されている。まず、フレーズの構造を知覚させる活動が紹介されている。それは、音楽のフレーズの区切りを見つけることから始まる。フレージングのみに注意を向けて音楽を聴き、フレーズの区切りを見つけたら、フレーズの始まりのところで何か簡単な合図をするという活動が提示されている(H'Doubler, 1921, p.55)。それから半フレーズと全フレーズとを聴き分け、全身運動の活動へと展開する。何か目標物を設定して、半フレーズか全フレーズの間、音楽のテンポに合わせてポルカ、スキップ、ランニング、ワルツ、スライドとステップを変化させながら目標物の方に向かって学習者を進ませ、フレーズの終わりか次のフレーズの始めで戻らせるという活動である(H'Doubler, 1921, p.55)。個人での活動から2人→3人→4人→5人と次第に人数を増やしたグループでの活動へと展開させ、フレーズの区切りでパートナーを交替したりリーダーに応答したりさせている。様々に異なるテンポやリズムでアクセントの位置を聴き取ることで、フレーズの区切りを知覚することを学ばせようとしていることがわかる。

以上のことから、Ⅴ～Ⅷでは、音価の違いを知覚すること、運動のリズムの違いを知覚すること、そして、音価の知覚と運動のリズムの知覚とを統合させることについて記述されていることがわかった。

（3）Ⅸ～Ⅹの概要―強弱による音と動きの質感の理解―

Ⅸでは、強弱の変化をつけることを学ばせている。具体的には、クレッシェンド、ディミヌエンド、スタッカート、強く、弱く、流れるように、の6種類の強弱のつけ方が提示されている(H'Doubler, 1921, p.56)。強弱を徐々に移行させたり瞬間的に移行させたりすることによって力性の質感に変化をつけることを学ばせていることがわかる。

Ⅹでは、短い課題曲を提示して、a.～d.に示す4つの基本的な性質を理解させようとしている(H'Doubler, 1921, pp.56-57)。

a. 音楽的なアクセントのつけ方―直観的な訴え

b. リズム的なアクセントのつけ方―知的な訴え

c. 感情的な訴え

d. 音符のパターン

a.とb.の違いは、a.が何らかの表現のためにアクセントを用いているのに対して、b.は拍の区切りを示すためにアクセントを用いているところにあると筆者は考える。したがって、a.は直観的な感覚に訴えかける表現的なアクセントのつけ方であり、b.は知的な認識に訴えかける物理的なアクセントのつけ方であるといえる。

以上のことから、Ⅸ～Ⅹでは、強弱による質感の変化を理解させ表現へとつなげること、なかでも、アクセントには異なる2つの役割があることを学ばせようとしていることがわかった。

（4）Ⅺ～Ⅻの概要―楽曲例を用いた総括的学習―

Ⅺでは、ハープ、ヴァイオリン、チェロといった2つか3つのパートのある器楽曲を聴いて、学習者が各楽器のパートを担当し、3人組で各自が担当する楽器が奏でる音楽を聴き分けて踊るという活動が紹介されている(H'Doubler, 1921, p.57)。課題曲の聴き取りを通して、これまで学習してきた音価の知覚、運動のリズム、音の強弱、動きの力性の変化とハーモニーがどのように課題曲の中に構成されているかを理解することを学ばせようとしていることがわかる。

Ⅻでは、例示された課題曲を初見で即興的に踊るという活動が紹介されている(H'Doubler, 1921, p.57)。Ⅻで提示された活動は、音と動きの構造を理解し、その知識と技術を習得したうえで到達する即興創作である。H'Doublerは、「『見てすぐに』踊ろうとすることは即興的であり自発的な活動である。」(H'Doubler, 1921, p.57)と述べている。即興創作を通して学習者の自発性をも育てようとしているといえる。

以上のことから、Ⅺ～Ⅻでは、それまで学んできた内容を、楽曲例を用いて総括的に学習することについて記述されていることがわかった。

2．*“Realization and Appreciation of Music through Movement”* の構造と特徴

次に、明らかになった12項目の概要を学習内容と指導方法に分類し、学習内容の特徴と指導法の特徴について考察した。表１は分類結果をまとめたものである。

表１　*“Realization and Appreciation of Music through Movement”* から抽出した学習内容と指導方法

	カテゴリー	概　　要
Ⅰ	学習内容	音楽の構造を理解する。
	指導方法	音符か黒板を使って示範する。
Ⅱ	学習内容	音楽がどのような要素から成り立っているかを理解する。
	指導方法	聴き取りの観点を学習者に与えて１節の音楽を聴かせる。
Ⅲ	学習内容	メロディについて、音の関係を理解する。
	指導方法	講義を行う。
Ⅳ	学習内容	拍子と音価の関係を理解する。
	指導方法	音符のブロックか黒板を使って説明する。 例示された音楽を学習者に聴かせて違いを区別させる。
Ⅴ	学習内容	等分の音価と不等分の音価に相当するダンスステップを理解する。
	指導方法	基本のステップを例示し、人数や方向やフォーメーションを変化させる。
Ⅵ	学習内容	典型的なリズムパターンにおいて音の長さと動きのタイミングを調和させることを理解する。
	指導方法	基本的なダンス音楽の形式を例示し、それらの典型例としての楽曲に基本ステップの動きを組み合わせさせる。
Ⅶ	学習内容	動きによってリズムを強調するための知覚を発達させる。
	指導方法	拍にのって様々な基本ステップや動作やポーズを行わせる。 テンポ、リズムパターン、部位、姿勢、人数を変化させる。
Ⅷ	学習内容	リズム的なアクセントづけのための知覚を発達させる。 フレーズの構造を知覚する。
	指導方法	音楽を聴いてフレーズの区切りを見つけさせ、フレーズの区切りで応答したり、動きの方向を変えたり、ステップを変化させたり、踊り手を交代させたりする。
Ⅸ	学習内容	強弱のつけ方を理解する。
	指導方法	強弱を徐々に移行させたり、瞬間的に移行させたりする。
Ⅹ	学習内容	楽曲例を用いて、下記の基本的な性質を理解する。 音楽的なアクセントを理解する。 リズム的なアクセントを理解する。 感情的な訴えを理解する。 音符のパターンを理解する。
	指導方法	記載なし
Ⅺ	学習内容	２つか３つの楽器パートのある器楽曲の構造を分析する。
	指導方法	３人組で各自に担当パートを割り当て、担当する楽器パートの音楽を聴き分けさせる。
Ⅻ	学習内容	即興的に踊る力と自発性を育成する。
	指導方法	例示された音楽を、初見で即興的に踊らせる。

（1）学習内容の特徴からの考察

Ⅰ～Ⅻの12のアイディアについて、学習内容に着目すると、これらのアイディアは下記の①～④に示すまとまりから構成されていると考察できる。

①Ⅰ～Ⅳでは音楽の構造と要素の理解

②Ⅴ～Ⅷでは音価の知覚と運動の知覚の統合

③Ⅸ～Ⅹでは強弱による音と動きの質感の理解

④Ⅺ～Ⅻでは楽曲例を用いた総括的学習

音楽の構造と要素を学んだ後に、音と動きとを結びつけてフレーズの構造を知覚させ、さらに、音と動きの強弱の質感とアクセントのつけ方を学ぶ、そして、総括的に楽曲例を用いて小グループで即興的に動くことを学ぶ、というように学習内容が展開していると推察される。

なかでも、H'Doublerが最も詳細に記述しているのは、②に示す<音価の知覚と運動の知覚の統合>であった。このことが何を示唆するかについての考察は、H'Doublerのダンス教育理論への理解を深める際の切り口となりそうに思われる。今後の課題につなげたい。

（2）指導方法の特徴からの考察

次いで、指導方法に着目すると、Ⅰ～Ⅻの概要から、下記の①～④に示す特徴が見出された。

①主観的な知覚と客観的な理解の統合

例：題材例となる音楽を学習者に聴かせてから、音の長さや強さが音楽の小節を構成するのにどのような役割を果たしているのかを理解させる(H'Doubler, 1921, p.51)。

②知的な理解と情緒的な表現の統合

例：音のアクセントがどのように音楽のフレーズを区切る役割を果たしているかを理解させた後、アクセントが聴く人の感覚や感情や情緒に訴えかけ、音楽に色彩や生命や表現を与えることを理解させる(H'Doubler, 1921, p.51)。

③ヴァリエーションの体験

例１：基本的なステップに人数、方向、フォーメーションを変化させヴァリエーションを体験させる(H'Doubler, 1921, p.52)。

例２：ワルツ、マズルカ、メヌエット、ポロネーズ、ポルカ、ショティッシュ、ガボット、マーチといった様々な音楽を用いてリズムパターンを変化させ、基本のステップとリズムパターンとの組み合わせのヴァリエーションを体験させる(H'Doubler, 1921, p.53)。

例３：テンポや人数を変化させ、基本的なステップに様々な部位を用いたポーズを組み合わせて動きのフレーズの連続を体験させる(H'Doubler, 1921, pp.54-55)。

④動きの探求と創作による自発性の育成

それまでのダンス教育では、既成のダンス作品の動きを教師が学習者に伝達し、学習者はそれを覚えて踊りを習得するという方法が主流であった。しかし、H'Doublerは学習者自身が動きを探求し創作するという方法を導入した。その方法は、学習者の自発性を促すものであった(H'Doubler, 1921, p.57)。

（3）学習内容と指導方法の特徴からの考察

H'Doublerは、「理解は知性を伴う。この重要な要素が欠ければ、経験は娯楽となり理解とはならない。」(H'Doubler, 1921, p.57)と記述している。経験を理解へと発展させるために、知的な理解と経験とを統合させることを重要視しているといえる。音の長さや強さなど物理的な条件から音楽のリズムが構成されることを知的に理解したり、音の強弱によって情緒的な表現が生み出されることを知的に理解したりする学習内容には、知的な理解と経験との統合が具体化されている(Ⅱ,Ⅸ,Ⅹ)。そして、音楽を知覚した後に音価や音の強さの役割を知的に理解する指導方法にもこの指導観が具体化されている(Ⅱ,Ⅳ,Ⅴ)。これは“*Exercises for Fundamental Motor Control*”の特徴である実践と理論の往還、及び主観的な認知と客観的な分析の往還(廣兼, 2015, pp.38-39)とも共通している。

また、H'Doublerは、音価の知覚と運動の知覚の統合において、様々なテンポやリズムパターンの音楽に合わせてウォーク、ラン、リープ、ホップ、スキップ、スライド、ギャロップなどの動きを行わせ、グループの人数、動きの方向、フォーメーションを変化させたり、ポーズを加えさせたり、動かす部位や動き方を変化させたりするなど、ヴァリエーションを創るための動きの条件を提示している(Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ,Ⅷ)。動きの条件を様々に変化させてヴァリエーションを創る指導方法は“*Exercises for Fundamental Motor Control*”とも共通している(H'Doubler, 1921, pp.13-30；廣兼, 2015, p.38)。

そして、H'Doublerは、ダンス学習において、いきなり表現活動や創作活動を行うのではなく、表現の基礎となる法則を理解し知覚を発達させたうえで表現へと至る、一連の学習過程を重視し実践していたといえる。表現においては、学習者の自発性の発揮を促していた。

Ⅲ　結論

H'Doublerの“*Realization and Appreciation of Music through Movement*”において、学習内容は①音楽の構造と要素を理解する→②音と動きの知覚を統合する→③強弱による音と動きの質感を理解する→④学習の総括として小グループで即興的に踊る、という順序で提示されていた。

これらの学習内容は、①主観的な知覚と客観的な理解の統合、②知的な理解と情緒的な表現の統合、③ヴァリエーションの体験、④動きの探求と創作による自発性の育成、といった方法によって指導された。

このような学習内容と指導方法により具体化された実践と理論の往還、主観的な認知と客観的な分析の往還、ヴァリエーションの展開は、”*Exercises for Fundamental Motor Control*”に示された指導観とも共通しており(廣兼, 2015, p.39)、1920年代にH'Doublerが提示したダンス教育理論、“The Wisconsin Idea of Dance”を特徴づけるものといえる。

Ⅳ　今後の課題

本研究によって、H'Doublerの“The Wisconsin Idea of Dance”における“*Realization and Appreciation of Music through Movement*”の学習内容と指導方法の概要が明らかにされ、“*Exercises for Fundamental Motor Control*”の学習とも共通する教材観や指導観の特

徴を明らかにすることができた。

前述のように、本書は教師用指導書として出版されている。そうであるならば、本書に記された表現の基礎となる12のアイディアは、H'Doublerのダンス教育理論において、教師が理解しておくべき教科の専門的知識として位置付けられよう。H'Doublerが提示したこれらのアイディアは、時代を超えた普遍性をもつ音楽理論を基盤としている点で、現代の日本のダンス教育へも一定の示唆を与えてくれるように思われる。

今後は、H'Doublerが教師用指導書である本書"*A Manual of Dancing*"の後に出版した理論書"*The Dance and Its Place in Education*"（H'Doubler, 1925）を講読し、ダンスのための音楽の学習に関するH'Doublerの教育理論についての理解を深めるとともに、H'Doublerの"The Wisconsin Idea of Dance"が"The Wisconsin Idea of Education"にどのように位置づくのかについての考察を進めたい。

次いで、それらの作業により明らかになった事柄をふまえて、H'Doublerのダンス教育理論が日本のダンス指導者によってどのように取捨選択されたかを明らかにし、何が受容されて何が欠落したかという史実の深層に存在する日米両国の人間観や教育観、そしてそれらを教育実践に具現化するにあたっての両国の体制の相違等についても考察したい。それらの課題への取組を通して、政治体制の異なる外国から教材を移入することの意味や限界について考えたい。

注

1）「基本的な運動筋肉の制御のための練習」（筆者による訳出。以下、英文文献からの引用は、全て筆者による訳出である）

2）「運動を通した音楽の認識と理解」（筆者による訳出）

3）「ダンスの手引き―ダンス教師のための提案と参考文献目録」（筆者による訳出）

4）Ⅳで学ぶことを指すと思われる。

付記

本研究は、平成26～30年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号：26350717）の助成をうけて行われた。

引用・参考文献

1）ドゥブラー：松本千代栄訳（1974）　舞踊学原論（現代舞踊学双書　1）. 大修館書店：東京pp.212-219.

2）五島敦子（2008）アメリカの大学開放―ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開―. 学術出版会. pp.83-84,89-109.

3）Hagood, T.K.（2000）*A History of Dance in American Higher Education：Dance and the American University.* The Edwin Mellen Press：New York, pp.81-101,144-149,335-339.

4）Hagood, T.K.（2000/2001）*Moving in Harmony with the Body：The Teaching Legacy of Margaret H'Doubler, 1916-1926.* Dance Research Journal 32(2)：32-51,95-97,99.

5）H'Doubler, M.N.（1921） *A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing.* Tracy & Kilgore, Printeps : Wisconsin, pp.13-31,51-57.

6）H'Doubler, M.N.（1972）*University of Wisconsin-Madison Archives Oral History Project：Interview #609, H'Doubler, Margaret,* by Brennan, M.A. University of Wisconsin. pp.13-19.

7）廣兼志保（2015）Margaret H'Doubler（1889-1982）が提示した *"Exercises for Fundamental Motor Control"（1921）* についての考察. スポーツ教育学研究35(2)：29-41.

8）木場裕紀（2016）マーガレット・ドゥブラーの舞踊教育論における経験の諸相―J. デューイを手掛りに―. 舞踊学（39）：pp.1-8.

9）木場裕紀（2017）アメリカ高等教育におけるダンス教育の誕生. 教育学研究84(2)：79-85.

10）Kraus, Hilsengar, and Dixon（1991）*History of the Dance in Art and Education.* 3rd.ed. Prentice Hall：New Jersey, p.300.

11）文部科学省（1994）教育用音楽用語. 第2版. 財団法人教科書研究センター：東京 pp.9-15,18,23,30,33.

12）Ross, J.（2000）*Moving Lessons : Margaret H'Doubler and the Beginning of Dance in American Education.* The University of Wisconsin Press：Wisconsin, pp.118-121.